第2回乳児ビタミンK欠乏症全国調査成績補遺

（分担研究：　新生児・乳児のビタミンK欠乏性出血症の予防に関する研究）

塙　　嘉之*　沢田　　健**

要　　約

昭和60年9月に行なった全国調査の成績は既に発表してある[1-2]が，今回は同じ資料で，特発性ビタミンK欠乏症（VKD）について，年度別推移，性，年齢別に検討を行なった。各年度とも全VKDに占める特発性VKDの割合は大きな差は無かった。但し，月齢別割合の年度別推移を見ると，生後2か月以降で発症する例の割合が，年と共に増加している傾向が見られた。

特発性VKDの性比は2：1であるが，発症時期については，女児よりも男児の方が早く発症し，平均発症年齢は男で37.1±15.9日，女で44.9±29.2日となった。出生時体重は1か月未満で発症した例は，1～2か月で発症した例よりも低い傾向が見られた。

見出し語：　乳児ビタミンK欠乏症，性差，全国調査

研究方法

昭和60年に行なった全国調査で得られた資料を対象にして，個々の症例について，性，年齢，出生体重を集計して検討した。

結　　果

1. 年度別症型別報告数（表1）

年間100例前後（昭和60は除く）が報告されており，全体に占める特発性の割合は81.1～88.9%に及んでいた。

2. 発病時の日齢別分布（図1，図2）

発症頻度のピークは，生後4週で突然出現している。但し，詳細に見ると男児では28日で，女児のピーク30日より2日早くなっている。従って，加齢に伴う性別累積曲線は，日齢28日以降男児の優勢が続いて見られている。

3. 特発性VKDの月齢，性別報告数（表2，3）

1か月未満例の全例に対する割合は，28.0%を占め，本症が1か月時にピークがあるといっても，その前の発症例も少なくない。男女比は，全体として2.05であるが，1か月未満児では2.56と男児優位が目立っている。又，平均発症年齢は，男，女で7日の差となった。

4. 特発性VKDの発症時月齢階級別，性別出生体重（表4）

厚生省人口動態統計における一般新生児の出生体重と比較して，男，女とも平均出生体重は低く，特に1か月未満で発症した例は，1～2か月で発症した例よりも，出生体重の低い傾向が見られた。

＊　東邦大学第一小児科
（First Dept. of Pediatics, Toho Univ. School of Medicine），
＊＊ 東邦大学新生児学研究室
（Dept. of Neonatalogy, Toho Univ. School of Medicine）

考　　察

乳児VKDの疫学的特性については，第2回全国調査報告（昭和61年度報告）が，なされているが，今回は，その補遺として，特発性VKDで若干の知見が得られた。

その第一は，特発性VKDの性差であって，本症が男児に多い事は従来からよく知られているところではあるが，今回の分析によると1か月未満で発症した群では特に男性優位で，その比は2.56に達している。VKDの男女比について，タイ国のIsarangkuraの報告[3]（1.8）や台湾の柯等[4]の報告（1.7）とも一致し，内田[5]のラットにおける実験で雄の方が雌よりもVKDに弱いという事とも符号して，興味深い。又，既に本原等[6]は，新生児期のVKDの発現は，その哺乳量に左右される事を述べているが，今回の著者らの解析で，早期に発症するものは，生下時体重の低い傾向のある事と併せて考えると，VKDは，出生体重が低く，哺乳量が低い男児に起こり易い事が示唆され，VKDを予防するに際し，一つの指標になるものと考えられる。

文　　献

1) 塙嘉之他：乳児VK欠乏性出血症第2回全国調査成績，日本医事新報，3239号，26-29頁，昭和61.

2) Hanawa, Y. et al：The second nation-wide survey in Japan of vitamin K deficiency in Japan, European J. Pediatrics（印刷中）

3) Bhanchet (Isarangkura), P. et al：A bleeding syndrome in infants due to acquired prothromnbin complex deficiency, Clinical pediatrics, **16**：992-998, 1977.

4) 柯佑民他：An epidemiological survey of VK deficiency in infancy in Taiwan，第111回中華民国小児科医学会，1987. 7. 26, 台湾，花蓮

5) Uchida, K et al：Relationships between dietary and intestinal vitamin Ks, clotting factor levels, plasma vitamin K and urinary GLA, 17th Steenbock Symposium "Current advances in vitamin K research", June, 21-25, 1987, Madison Wisconsin, USA

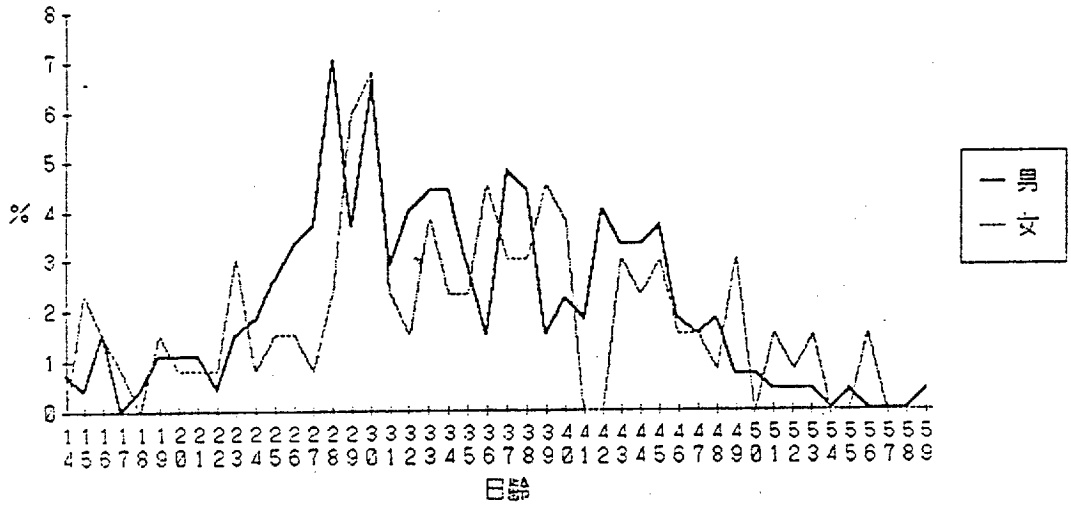
6) 本原邦彦：新生児ビタミンK欠乏と哺乳量の検討，日本小児科学会雑誌，**91**：1435-1441, 昭62

表1.

年度別病型別報告数

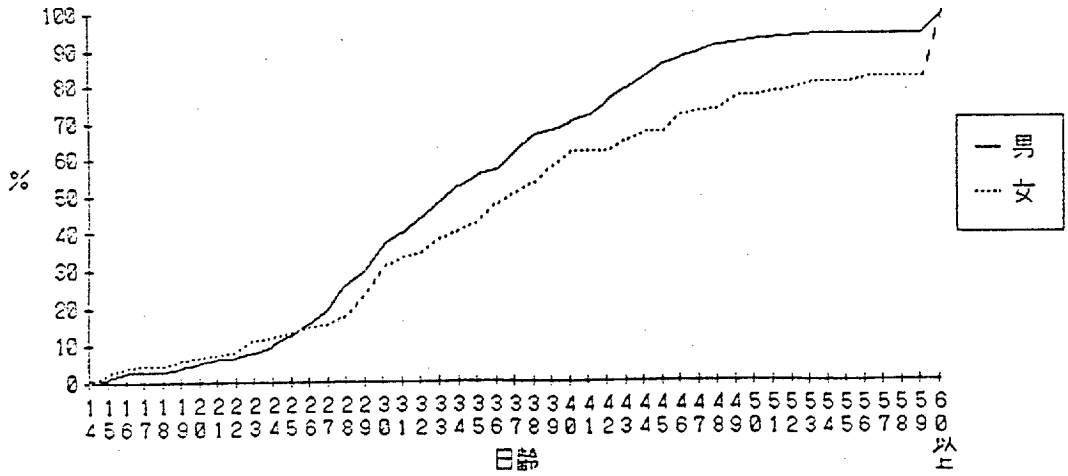
	特発性(A)	二次性(B)	計(C)	A/C(%)
昭56	96	12	108	88.9
57	112	15	127	88.2
58	92	18	110	83.9
59	77	16	93	82.6
60*	30	7	37	81.1
計	407	68	475	85.7

＊1－6月



特発性ＶＫＤの日齢別割合

図1.



特発性ＶＫＤの加齢に伴う性別累積曲線

図2.

表2.
特発性ＶＫＤの月齢階級別、性別報告数

	男		女		男／女	不明	計	
	例数	%	例数	%	%	例数	例数	%
1ヵ月未満	82	30.1	32	24.0	2.56		114	28.0
1－2ヵ月未満	175	64.3	77	57.9	2.27	2	254	62.4
2ヵ月以上	15	5.5	24	18.0	0.63		39	9.6
計	272	100	133	100	2.05	2	407	100

表3.

	N	M	SD
男	272	37.1	15.9
女	133	44.9	29.2
全　体	405	39.7	21.5

表4.
特発性ＶＫＤの月齢階級別、性別出生時体重の比較

発症時月齢	出生時体重					
	男			女		
	N	M	SD	N	M	SD
2週－1ヵ月未満	79	3095.3	434.3	30	3023.7	412.9
1－2ヵ月未満	166	3102.8	505.0	71	3145.4	330.4
2ヵ月以上	15	3003.5	504.7	24	2834.6	737.5
全　　例	260	3094.8	485.1	125	3056.5	470.7

厚生省(昭和58)	3,210g	3,130g

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

昭和60年9月に行なった全国調査の成績は既に発表してある1-2)が,今回は同じ資料で,特発性ビタミンK欠乏症(VKD)について,年度別推移,性,年齢別に検討を行なった。各年度とも全VKDに占める特発性VKDの割合は大きな差は無かった。但し,月齢別割合の年度別推移を見ると,生後2か月以降で発症する例の割合が,年と共に増加している傾向が見られた。特発性VKDの性比は2:1であるが,発症時期については,女児よりも男児の方が早く発症し,平均発症年齢は男で37.1±15.9日,女で44.9±29.2日となった。出生時体重は1か月未満で発症した例は,1～2か月で発症した例よりも低い傾向が見られた。